

復習シート 第一学年 国語



組	番号	名前

【「読むこと」を問う問題】

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

八歳の良平は村はずれの工事現場にあるトロッキに一度は乗ってみたいと思っていた。ある夕方、勝手にトロッキに乗ったところを土工たちに見つかり、どなられてしまう。そののち十日余りたち、今度は親しみやすそうな若い男二人が押すトロッキを見かけ、良平はそばへ駆けていった。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、――しまのシャツを着ている男は、うつむきにトロッキを押したまま、思ったとおり快い返事をした。

「おお、※押してくよう」良平は二人の間に入ると、力いっぱい押し始めた。

「※われはなかなか力があるな」他の一人、――耳に巻きたばこを挟んだ男も、こう良平を褒めてくれた。その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくともいい」

――良平は今にも言われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起こしたぎり、黙々と車を押し続けていた。良平はどうとうこらえきれずに、おずおずこんなことを尋ねてみた。

「いつまでも押していいい？」

「いいとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。五、六※町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。そこには両側のみかん畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り道の方がいい、いつまでも押させてくれるから。」――良平はそんなことを考えながら、全身でトロッキを押すようにした。みかん畑の間を登りつめると、急に線路は下りに

なった。しまのシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ。」と言った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、みかん畑のにおいをおりながら、ひた滑りに線路を走り出した。「**1**よりも**2**方がずっといい。」——良平は羽織に風をはらませながら、あたりまえのことを考えた。「行きに押すところが多ければ、帰りにまた乗るところが多い。」——そうも考えたりした。竹やぶのある所へ来ると、トロッコは静かに走るのをやめた。三人はまた前のように、重いトロッコを押し始めた。竹やぶはいつか雑木林になった。爪先上つまさきがりのところどころには、赤さびの線路も見えないほど、落葉のたまっている場所もあった。その道をやつと登りきつたら、今度は高い崖がけの向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来すぎたことが、急にはつきりと感じられた。三人はまたトロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走っていた。しかし良平はさっきのように、おもしろい気持ちにはなれなかった。「もう帰ってくればいい。」——彼はそうも念じてみた。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼らも帰れないことは、もちろん彼にもわかりきっていた。

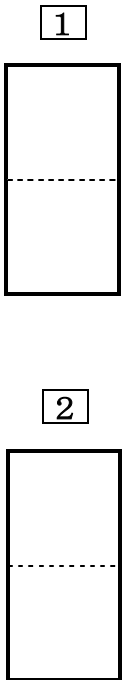
（芥川龍之介「トロッコ」による。）

〈注〉※押していくよう||押してくれよ。 ※われは||君は。おまえは。

※町||長さの単位。一町は約一〇九メートル。

(1) **1**・**2**にあてはまる言葉を、本文中よりそれぞれ二字で抜き出しなさい。

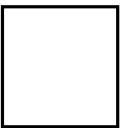
レベル7



(2) ——線部「おもしろい気持ちにはなれなかった。」とありますが、その理由の説明として最も適切なものを次の1〜4の中から一つ選びなさい。

レベル8

- 1 雑木の枝の下を走ったため、さっきより眺めがよくなかったから。
- 2 トロッコを独り占めしたいのに、二人の土工がなかなか帰らないから。
- 3 余りに遠くへ来すぎてしまい、帰りのことが心配になってきたから。
- 4 遠くまで重いトロッコを押し続け、さすがに疲れが出てきたから。



埼玉県学力・学習状況調査（中学校）

復習シート 第一学年 国語

埼玉県学力・学習状況調査



組	番号	名前	模範解答
---	----	----	------

【「読むこと」を問う問題】

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

八歳の良平は村はずれの工事現場にあるトロッコに一度は乗ってみたいと思っていた。ある夕方、勝手にトロッコに乗ったところを土工たちに見つかり、どなられてしまう。そのうち十日余りたち、今度は親しみやすそうな若い男二人が押すトロッコを見かけ、良平はそばへ駆けていった。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——しまのシャツを着ている男は、うつむきにトロッコを押したまま、思ったとおり快い返事をした。

「おお、※押してくよう」良平は二人の間に入ると、力いっぱい押し始めた。

「※われはなかなか力があるな」他たの一人、——耳に巻きたばこを挟はさんだ男も、こう良平を褒ほめてくれた。その内に線路の勾配こうばいは、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくともいい」

——良平は今にも言われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起たこしたぎり、黙もく々と車を押おし続けていた。良平はどうとうこらえきれずに、おずおずこんなことを尋たずねてみた。

「いつまでも押していい？」

「いいとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。五、六※町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。そこには両側のみかん畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り道の方がいい、いつまでも押させてくれるから。」——良平はそんなことを考えなが

ら、全身でトロッコを押すようにした。みかん畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。しまのシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ。」と言った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、みかん畑のにおいをあおりながら、ひたすべりに線路を走り出した。「1よりも2方がずっといい。」——良平は羽織に風をはらませながら、あたりまえのことを考えた。「行きに押すところが多ければ、帰りにまた乗るところが多い。」——そうも考えたりした。竹やぶのある所へ来ると、トロッコは静かに走るのをやめた。三人はまた前のように、重いトロッコを押し始めた。竹やぶはいつか雑木林になった。爪先上りのところどころには、赤さびの線路も見えないほど、落葉のたまっている場所もあった。その道をやつと登りきったら、今度は高い崖がけの向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来すぎたことを、思いはようと感じられた。三人はまたトロッコへ乗った。車は海を右にしながらつていった。しかし良平はさっきのように、**おもしろい気持ちにはな**つてくれればいい。」——彼はそれも念じてみた。が、行く所まで行きツッコも彼らも帰れないことは、もちろん彼にもわかりきっていた。

（芥川龍之介「ト

「当たり前のことを考えた」や「行きに押す所が多ければ、帰りにまた乗る所が多い」というセリフから、トロッコを押しているときよりも、トロッコに乗っているときの方がより喜びを感じていることがわかります。

〈注〉※押してくよう||押してくれよ。

※われは||君は。おまえは。

※町||長さの単位。一町は約一〇九メートル。

(1) 1・2 にあてはまる言葉を、本文中よりそれぞれ二字で抜き出さない。

レベル7

1

押す

2

乗る

(2) ——線部「おもしろい気持ちにはなれなかった。」とありますが、その理由の説明と

して最も適切なものを次の1〜4の中から一つ選びなさい。

レベル8

- 1 雑木の枝の下を走ったため、さつきより眺めがよくなかったから。
- 2 トロッコを独り占めしたいのに、二人の土工がなかなか帰らないから。
- 3 余りに遠くへ来すぎてしまい、帰りのことが心配になってきたから。
- 4 遠くまで重いトロッコを押し続け、さすがに疲れが出てきたから。

「余り遠く来過ぎた」や、直後の「もう帰ってくれば好い」などから、最初はトロッコを押したり、乗ったりすることに夢中になっていたが、かなり遠くまで来てしまったことに気づき、いつ帰ることができるのか、と心配になっている心情が読み取れます。